

<ESSAY>

天国にいちばん近い島

渡辺 尚夫 *



すっかり暗くなった真冬の駐車場、着ていた防寒ジャケットを車に脱ぎ捨て、Tシャツ1枚の凍える姿で暖房の利いた送迎のマイクロバスに乗り込む。数分でバスは成田空港の出発ラウンジ前に横付けされ、20時40分発のエールフランス機は定刻に離陸した。フランス人と日本人の客室乗務員が、エアスプレーを両手で持ち、暖房を利かせたエアコンの吹き出し口に沿って笑顔と香水を振りまきながら機内を回ってゆく。フランス料理の機内食で遅い夕食をすませ、ワインが心地よい眠りを誘っている頃、機内アナウンスは赤道を越えたことを告げる。翌朝、機体が高度を下げ始めると、眼下には何処までも続く珊瑚礁が姿を現す。軽い衝撃と共に着陸したところは、真夏のトントウータ国際空港。いつの間にか暖房から冷房に切り替わった機内からタラップを降りると、強烈な太陽と湿気を含んだ熱気が歓迎してくれる。ここは、天国にいちばん近い島、ニューカレドニアへの入口である。国際空港や、首都ヌメアがあるグランドテール島は、イギリス海軍エンデバー号船長のジェームズ・クックが、故郷カレドニアの高原を思い出したように、1600m級の山々が連なっている。しかし、あまりの美しさに言葉を失う天国にいちばん近い島ウベア島は、珊瑚で出来た環礁の島。台風にも襲われれば、島全体が水没してしまいそうな、低くて小さな島である。

小説や映画で誰もが知ることになったこの島は、日本人の注目を集めているが、同じメラネシアの中に、ウベア島と同じ環礁の島々からなるツバルという国がある。九つの島からなるこの国の平均海拔は、驚くことになった2m。近年はエルニーニョの影響もあって台風の被害が深刻のようだ。

海面は太陽と月の引力によって、ほぼ一日周期で満潮と干潮を繰り返している。そこへ台風が来ると二つの原因によって潮位が上昇する。吹き寄せ効果と吸い上げ効果である。台風による風が島に吹き寄せることで、その風の2乗に比例して海面が上昇する。風速が2倍になれば海面上昇は4倍になる。また、気圧が下がることにより海面は上昇する。外洋では1hPa気圧が下がると、1cm海面が上昇する。つまり、1000hPaだった気圧が台風により950hPaになれば、50cm上昇することになる。これが吸い上げ効果だ。気象庁のデータによると平成8年9月、台風17号が関東地方の南を通過したとき、八丈島では最大風速28.8m/sの強風が吹き続けたため、通常の潮位より283cmも高い潮位を観測している。八丈島ではともかく、たった海拔2mの国にとっては、恐ろしい状況になることが想像出来る。

人間が活発に活動すれば、温室効果ガスが大気中に大量に放出され地球温暖化が促進される。これは産業革命以来顕著で、それまではゆっくり冷え続けてきた平均気温が100年間で0.6度という急上昇を示し、海面は10cm~25cm上昇した。このまま放置すると2100年には2℃上昇すると考えられているので、更に30cm以上は上昇することになる。日本の砂浜は、海岸の24%であり、その43%は近年浸食され、過去70年間ですでに120km²の国土が失われてきたが、30cmの上昇はこれと同じ面積の砂浜が無くなることを意味する。そんな地球温暖化の影響で、ツバルでは海岸線の浸食により道路の半分が波に流されたり、砂を固定する力があり海岸線を守っている椰子の木が、直接受ける波によって倒されている。また、住民の貴重な飲料水である地下水に海水が混入したり、海水を被った畑地に作物への被害が発生している。

昔、日本沈没という小説や映画があったが、ツバル政府はまさしく沈没の危機に瀕した国民を守るため、オーストラリアやニューージーランドへの移住計画を進めている。農業と漁業で生計を立て、ほとんど温室効果ガスを放出していない人口1万人余りのツバルの国民にとって、日本を含めた先進国が出し続けてきた温室効果ガスの影響で、あの美しい珊瑚の島を離れなければならないと言うことは、どうしても納得の行かない理不尽な出来事であろう。沖の鳥島が水没したら排他的経済水域が無くなるため、50億円の投資をして守る日本の姿を、ツバルの人々はどう眺めているのか私は知りたい。

*川崎市水道局 生田浄水場